

AR CA DIA

55

WINTER 2013

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース

[アルカディア]



眼の極楽 六 人の姿かたちを描く⑤

館長 榊原悟

(承前)本法寺本『涅槃図』に洋犬が描かれた事情を探ってみた。その洋犬は、

- ・ 本法寺本の方に登場すること
- ・ 他の動物たちのように釈尊の死を嘆くかたちを取っていないこと
- ・ 極めて迫真的であること
- ・ 等伯独自の写生に基づいて描かれたこと

では問題の緑衣の男はどうだろうか。額が突き出した特徴ある禿げた頭に、ゲジゲジで下がり気味の眉、長い口ヒゲと、単に個性的と云うだけでは収まりきれない実人的風貌をもつ。風貌の怪異さが属性の羅漢たちの中にあつてさえ、その存在が際立つ。

しかも彼は悲しみの感情を露わにはしていない。左手を肩に置き、右手で頬杖をつく。垂れた目を細め、口ヒゲで隠されているが、口をへの字に結ぶ。大きな額にタテ皺、ヨコ皺が深い。これで静かに哀悼の気持ちを表したと云えなくもないが、菩薩や羅漢、天部、仏弟子ら「涅槃図」に描かれた会衆たちすべてが、動物までも、大きく口を開けて号泣、涙をぬぐい、胸をたたき、双手を挙げ、ついには身悶え大地に伏しているのを見れば、その違いは歴然。果たして彼は本当に悲嘆しているのかさえ疑わしい。

いや、それだけではない。そもそもわたしたちが、この緑衣の男に「涅槃図」に描かれた者として違和感を覚えるのは、他の「涅槃図」に、これに類した人物が一人として見当たらないからである。彼は誰なのだろうか、と。

とは云え単に頬杖をつく男と云うのなら、海西人すなわち九州出身の絵仏師と見られる良全の『涅槃図』(嘉暦三年、一三二八、福井・本覚寺蔵)や明兆の東福寺本(応永十五年・一四〇八)にも登場する。だがこちらは上半身裸で、潰れたような異様な面貌はいかにも羅漢風。実人風が著しい緑衣の男とは明らかに一線を劃す。

さらにこの緑衣の男の姿を、拘尸那城の工匠(鍛冶工)優婆塞純陀に重ねて見ようとする説もある(赤沢氏前掲書)。以下の記述はこの書に負うところが大きい。と云うより、そもそも長年暖めてきた此論を、こういうかたちでまとめようと思つたのも、この書で赤沢氏の見解を知ったことが一因でもある)。言うまでもなくこの純陀こそが、釈尊入涅槃の原因をつくった人物。彼が捧げた食事を撰つた釈尊は、それで食中りを起こし(きのこ料理であった)、ついに亡くなるのだが、自らの釈尊への供養が、そのような重大な結果招いたことに大きな責任と後悔の念を抱いた純陀について、釈尊は、

その食事を食べたことで煩惱の残りの無い完全な悟りに至り、涅槃に入ることができたのだ

と弟子阿難に語り、純陀を慰めるよう言い置いた、という。釈尊入涅槃に至る話の中で最も重要な役まわりを演じ、在家信者・供養者の象徴とも云うべき男、それが純陀であった。それ故、純陀捧飯は、釈迦の一生を語る上で必須の事蹟として「釈迦八相図」に描かれるのを常とした。むろん多くの「涅槃図」にも登場した。その際、純陀の姿は、いかにも鍛冶工らしく頭巾・長帯を着け、挿話で述べた捧飯すなわち山盛りの御飯を捧げ持つ図像にするのが多い。

ところがこの純陀の図像から、やがて捧飯のかたちが消える。「八相涅槃図」(「涅槃図」に伝七事跡を描き添えたもの)で、純陀捧飯が、そのうちの二相に取り上げられたためである。しかし捧飯のかたちは、純陀が純陀であるための図像的典拠である。そのかたちを失った彼はもはや純陀であるはずもない。結果、純陀は、単なる頭巾・長帯姿の無名の職人の一人となった。

明兆の東福寺本や、その東福寺本の祖本となったともみられる良全の本覚寺本に登場するのは、まさしくこの職人姿の男である。いずれも画面右端に描かれている。腰に長帯を締め、頭巾を被る。しかし捧飯の体をとらない。だが袖で涙を拭う姿さえあれば、とりあえず釈尊涅槃の会衆の表現には充分なのだろう。またそう

であればこそか、大徳寺の松栄本に至っては、頭巾は被るものの、もはや長帯は締めていない(図1)。だが天空を仰ぎ、左手で顔をおさえる——ここでも悲嘆のかたちだけは保守されている。言うまでもなくそれが会衆であるための必須の図像であったからだ。その彼のすぐ下に「狩野戸部直信筆」と落款が入れられている。そのこと着目した赤沢氏は、この職人風人物こそ絵師直信(松栄)の画像であることを示唆するとみた。だが彼を描く視点を斜め後方に設定、しかも顔を手で掩う。あえてこれを自らの画像として描きたいのなら、こんな姿態、角度から描くはずもない。ここは彼を職人風の男某とみるのが穏当なところ。

そして、本法寺本の緑衣の男である。既に述べたように頭巾は被らないものの、長帯を襷に掛ける。彼もまた職人風の男の図像に連なる一人なのだろう。しかし悲しみの表情、姿をとらない。これではとても会衆の一人とは言えない。

だが等伯は、「涅槃図」の会衆の中に、頭巾・長帯姿の職人風の男がいることを、間違いない承知していたはずだ。幸いにも等伯がなお故郷に在って信春と号し、仏画を描いていた頃の『涅槃図』が遺されていた。羽咋の妙成寺の二本で信春三十歳、永禄十一年(一五六八)の作である。この後、数年を経、信春は上洛を果たす。その妙成寺本に緑衣の男が登場するのだ(図2)。それも頭巾に長帯を締め、釈尊を凝視しつつ合掌する。会衆の一人としての条件をすべて備えた像容である。その図像的淵源までとはともかく、等伯が頭巾・長帯の男の存在を知っていたことは間違いない。

加えて見逃すべきでないのは、北陸本面に、この妙成寺本も含め意外に多くの長谷川派の『涅槃図』が遺されている点である(「長谷川等伯展」能登時代の仏画と北陸の長谷川派」図録 七尾美術館 二〇〇四年)。都合八本を数える。それらは、仏弟子阿那律の先導で初利天より降臨する摩耶夫人に、鬘を捧げる侍女が従っているか否かとか、会衆たちの着衣の色などに違いがあるものの、基本的にはほぼ同一の図像になる。

しかもそれら八本のうち最も古様で、その祖本とも目される『涅槃図』が七尾の長寿寺に遺されていた。近年そこに捺された白文方印が「無分」と読み得ることが判明(松原茂「七尾市・長寿寺蔵「無分印涅槃図」——等伯研究への波及——

「ミュージアム」603号 二〇〇六年)、それが、従来「無文」と表記されてきた等伯の祖父法淳の作であることが確認された。加えてもう一本、長寿寺本に酷似する作があった。「宗口」の白文方印を捺す穴水の来迎寺本が、それである。「宗口」は養父の宗清道浄のことだろう。

法淳も道浄も、本法寺本『涅槃図』の袿背供養銘にその名を記されていたはずだ。その二人もまた妙成寺本と同一図様の『涅槃図』を描いていた。つまり長谷川一族・二門には、祖父・父、そして信春(等伯)と描き継がれた『涅槃図』の規範とも云うべき図像があったのだ。そこに頭巾・長帯の男が確かに描かれていた。むしろ信春が妙成寺本を描くに当たっても、その父祖以来の図像に倣ったのだ。

だがそれから三十年後、本法寺本の制作で等伯は、その二門にとつての規範的図像を採用しなかった。いや、多くの会衆の中には、それから取ってきた像容を示すものも無いわけではない。しかし、頭巾・長帯姿の男をついに描くことはなかった。その代わりに登場したのが、問題の緑衣の男であったのだ。しかもこの問題の男は、東福寺本や大徳寺本など、先行する『涅槃図』諸本に一切描かれたことはない。つまり緑衣の男は、ただ二つ本法寺本『涅槃図』だけにみられる、孤立・孤独の図像であったのだ。それは、あたかも前回述べた洋犬を思わせる。となると洋犬が、これを描いた絵師と密接な繋がりがあるのでは——その究極のかたちがペットである——と推定したのと同様、この緑衣の男も等伯および本法寺本の制作と深い関係を持つ、と考えるのも不思議はあるまい。その関係を突き詰めれば、彼の姿に等伯その人が重なると思うのだが、どうだろう。



図1



図2

ESSAY

二〇二二年、 印象に残った 展覧会

館長 柳原悟

1. 宸翰 天皇の書（京都国立博物館）

それぞれの時代の文化的領導者として天皇は無視できない。その天皇の書が一堂に会した得がたい機会。伏見、花園両天皇の書は正直素晴らしい。しかし、そうなるについては、天賦の才だけでなく、たゆまぬ修練があったようで、展示でそれが具体的に示されていた。面白い。

2. 江戸絵画の楽園展（静岡県立美術館）

図録のあとがきに展覧会を企画する上で拙著『日本絵画の見方』が多少とも参考になったとあるので、本展を挙げるのは気がひけないわけではないが、作品選びの見事さ、図録解説の面白さで、素直に本展を押しす。

3. 芭蕉（名古屋博物館）

尾張、三河と芭蕉との係わりに焦点を絞った点、当然のことながら、しかし、それを資料という具体的なもので示し得たことは、お見事。それについても尾張も三河も言葉は悪いが、こうした俳諧師という高等遊民たちを支える経済力、文化力があつたことを、いまさらながら痛感した。現在の愛知県はどうなのだろう。そうした力があるのだろうか。

副館長 荒井信貴

1. 魔術／美術（愛知県美術館）

斬新な切り口の面白さと、愛知・岐阜・三重の3県のコレクションの豊かさを痛感。

2. 近代洋画の開拓者 高橋由一（東京藝術大学美術館）

きこちないけど、妙に真剣で、伝わるものは素朴。日本洋画の黎明を語る好企画。

3. 湖北の観音（長浜城歴史博物館）

近江の観音信仰の奥深さとそれを守り伝える地域の文化力に敬服。まつたりとした時間を過ごせました。

4. 土偶・コスモス（MIHOミュージアム）

東博展を見損ないMIHOへ。よくぞ集めた土偶ばかり。原始の信仰美に嘖然。

5. 宇佐美圭司 制動・大洪水（大岡信ことば館）

堀江登志実

1. 芭蕉（名古屋博物館）

芭蕉真筆の多くを目の当たりにして感動。芭蕉を慕う岡崎の俳人鶴田卓池の資料に接してきた私にとつても芭蕉は憧れの存在である。真筆を中心とした同時代資料と、のちの時代に俳聖として崇められる

芭蕉イメージを対置しながら芭蕉の活動の全貌が明らかに。近代以降現代に至るまでの芭蕉に触発された作品にも焦点をあてたのは、芭蕉理念「不易流行」に対する展示企画者の思いと期待でもあろう。

稲垣満春

1. 豪快なる大倉財閥の美術コレクション（大倉集古館名品展）

十一月、ミレーに出逢える美術館として親しまれている山梨県立美術館で開催されていた大倉集古館名品展を見に行った。昭和五年にイタリアのローマで開催された「ローマ開催日本美術展」で出品された近代日本画の巨匠たちの名品の数々が勢揃いするということが、担当する展覧会が終了したら絶対に見に行こうと思っていた。横山大観の「夜桜」はじめ、どの作品も作家の並々ならぬ意気込みが感じられる大作ばかりで、近代日本画だけでも十分見応えのある展覧会であった。因みに、最も印象に残ったのは川合玉堂の「秋山懸瀑」。本紙部分で縦二メートルを超える軸装の大作で、近景から遠景までを縦長の画面に積み重ねるように配した描法は、玉堂にしか成し得ないもので、玉堂芸術の真骨頂を見せつけられた思いであった。

村松和明

1. マウリッツハイイス美術館展（東京都美術館）

近年のフェルメール・ブームとも言える現象には目を見張るものがある。フェルメールの作品が一点でもあれば、それだけで記録的な入館者数を記録することになる。他の出品作品は問わず、とにかくフェルメールを見に行く…客寄せパンダ…とはよく言ったものだが、この数年でそのような展覧会が毎年のように繰り返されてきた。中にはレベルの高い展覧会もあったが、残念ながら豪華一点主義に終始してしまった展覧会も散見された。

二〇二二年は、フェルメールを目玉にした展覧会が三本たて続けに開催され、いよいよフェルメール人気を強く印象づけた。なかでも東京都美術館で開催された「マウリッツハイイス美術館展」は、フェルメールの「真珠の耳飾りの少女」を目玉とはしていたが、オランダ・フランドル絵画コレクションでは名高いマウリッツハイイス美術館の作品群とあつて、出品作品も粒ぞろいで満を持した感があつた。一七世紀のオランダ・フランドル絵画、約五十点が展示されたが、フランドルのルーベンス、ヴァン・ダイク、ヤン・ブリューゲル（父）などの巨匠と、オランダ絵画を代表するレンブラント、ハルスほか西洋絵画史に大きな足跡を残した画家たちの代表的な作品が並んだ。

上野動物園には、一昨年パンダが戻ってきてその賑わいを取り戻したが、同じ公園内の東京都美術館には、フェルメールのみならず、質の高いバロックの名品が並んだことが印象的であつた。

浦野加穂子

1. 絵解きがつてなあに？（龍谷ミュージアム）

仏教絵画を読み解き、観る者に語りかける「絵解き」。日本人と仏教絵画の結びつきを、「絵解き」という角度からとらえる。今に受け継がれている「絵解き」を上演したり、愛らしいキャラクターやデザインを用いて仏教絵画を親しみやすく紹介する工夫も。

2. 古都鎌倉と武家文化

（神奈川県立歴史博物館、神奈川県立金沢文庫、鎌倉国宝館）
理由は裏表紙おしゃべりあれこれにて。

3. 美術にぶるっ！（東京都立近代美術館）

開館六十周年を迎えた近美選りすぐりの名品により、日本近代美術の百年を回顧する。六十年の収集活動の成果を問う第一部と近美が誕生した一九五〇年代の日本を考察する第二部。第一部は近代垂涎の名画にぶるっ、第二部では戦後の復興期、戦争体験や現実の矛盾に対峙した作家たちの鬼気迫る姿勢に、そして五〇年代という時代に真つ向から向き合った近美の姿勢にぶるっ。

伊藤久美子

1. 草間彌生 永遠の永遠の永遠（松本市美術館）

圧巻の草間ワールド。これでもかと暴力的なほどの原色、水玉の世界に強い拒否感を覚える一方で、次第に彼女の強い意志のなかへ吸い込まれ、生命力と安らぎをもらってしまうような心地に。故郷松本での開催は展示場のみならず、美術館外壁や市内バスにも水玉デコレーション。印象的な宣伝もお見事。

千葉真智子

1. 今和次郎 採集講義展

（パナソニック電工 汐留ミュージアム）

関東大震災以降の変わりゆく東京の姿を記録に留めようとする、今和次郎の執拗なまでの態度と目の付け所の面白さに改めて脱帽。ほかにも今和次郎の食器類や建築家具図面、またとりわけ東北での活動を大きく紹介するなど、広くはない空間に充実した内容。

2. KATAGAMI STYLE

（三重県立美術館）

日本のデザインが、「型紙」という原型を通してアー・ル・ヌーヴォーやユークレントシユティールの装飾とデザインに転用されていたことを実感。伊勢型紙という三重県に残る遺産を学術的に見直し価値づける姿勢に敬服。隣県ながら、三河湾をぐるりと電車に乗って向かう道中は、ちよつとした小旅行。このところ「橋本平八と北園克衛」「イクムラレイコ」「蕭白ショック！」など面白い展覧会が多く、もう少し近かつたらなお嬉しいと思ってしまう。

3. 志賀理江子 螺旋海岸（せんだいメディアテーク）

イメージの強度に圧倒された。土着的であり、神話的であり、それ故に原初的な崇高さを感じると共に、螺旋状に配置された展示構成によって、各写真が共鳴し増幅し合い、作家の頭の中を巡っているようでもあつた。

4. 小林耕平 あなたの口は掃除機であり、ノズルを手で持つことで並べ替え、電源に接続し、吸い込むことで語る。（山本現代）

思考の飛躍。ものの方、固定概念が、ユーモアを伴いながら軽やかにひっくり返される。

EXHIBITION

暮らしの うつりかわり

伊藤久美子

昭和三〇年代半ばからの高度経済成長のなかで、在来の伝統的な生活道具は古くさい、非効率的な道具として影をひそめ、利便性と引き換えに姿を消していきました。五〇年ほど前のことです。しかし、時代が平成へと移ると昭和の暮らし、とくに三〇年代の生活が見直され、映画「ALWAYS 三丁目の夕日」の影響もあって、その頃の生活や町並みが脚光を浴びました。いわゆる「昭和回顧ブーム」で、私たちはなつかしさを求めました。

その平成時代も今年で四半世紀を迎えています。当り前のことですが、昭和という時代を未経験の大人たちも増えています。こうした人々たちにとっては、なつかしさではなく新しいものとして受け入れられているのでしょうか。

この展覧会では、二十二年度に引き続いて「暮らしの変遷」をテーマとし、美術博物館が収蔵する古い生活道具を中心に紹介します。明治期から昭和三〇年代までの生活道具などを、四つのテーマに沿って幅広く取り上げ、約280点を御覧いただきます。身近な暮らしの道具にスポットをあ

EXHIBITION

てた「衣食住を支えた身近な道具たち」、明治から昭和戦前にかけて尋常小学校で使われた教科書を取り上げた「むかしの教科書を見てみよう」、消防の道具類を中心に先人たちが災害に備えた資料を紹介する「暮らしを守る」、そして、桃の節句にあわせて雛人形や土人形を飾った「ひなまつり」という構成になっています。

同時に、ここで取り上げた資料は、多くの方々から岡崎市へ寄贈していただいたものでもあります。こうした郷土の暮らしを伝える身近な文化財の公開、活用場にもしたいと思います。

古い道具は先人たちが生活をより機能的に、より豊かにするために、長年の生活経験のなかから知恵を働かせて考えだし、工夫を凝らして作り上げてきた英知の結晶です。現代社会は先の見えない後ろ向きな時代であり、だから人びとはなつかしさを求めているのだとも言われます。格段に便利になった生活を享受して、今を生きる私たちは、単になつかしさを感じるだけでなく、これら道具から現代の生活や社会にも伝承されてきた知恵と工夫をくみ取って、今の暮らしを見つめ直す機会になればと考えます。

なお、本展では、公立小学校三年生の学習「古い道具と昔の暮らし」をお手伝いできるよう配慮していますので、平日には学校団体見学が予定されています。子どもたちにむかしの道具の実物を間近に見てもらおう機会を提供し、それを作った人、大切に使用した人、大事にとっていた人がいて、そうした道具にはむかしの人の知恵や心がこもっているというのを感じてもらいたいと思います。そして、身の回りの古い道具を探し、むかしの暮らしの様子をさぐる手助けとなれば幸いです。会場で小学生の団体見学会に合わせた大人の方は、道具を使った経験談を話してあげて下さい。何よりの解説になるはずですよ。

また、これからの資料収集につきましても、広く皆さまの御協力をいただきますようお願い申し上げます。



氷冷蔵庫

画家宇佐美圭司氏が亡くなった。最後の展覧会を見て、そう遠い日ではないことはわかってはいたが、やはり早すぎとの思いが迫ってくる。宇佐美氏にお目にかかったのは一度きり。それが学芸員として作家と交渉する最初の仕事であり、まだ国分寺にアトリエを構えておられた頃のことであった。美術を知らない私が唯一その名を知っていた日本の現代美術家が氏で、高校時代、訪れた大阪万博の鉄鋼館で見たレーザー光線の作品で知ったのだった。私の興味は武満徹やクセナキスの現代音楽に惹かれて入ったのだが、音と光の場のもつ強烈な静と動の対比に随分感心させられ、また氏が高校卒業から単身アメリカへ渡って努力されたことなど、小沢征爾のように心のヒーローになるのに十分であった。子ども美術博物館の寄託作品の返却と新たな購入の話が用向きであったが、話の主題は武満や音楽との関わりばかりであった記憶がある。

直接お目にかかったのはそれきり。後に美術博物館へ移り、荻太郎先生に親しくさせていただくとも

た氏のことが話題に。氏の奥様が荻先生の画塾生であったこと、氏との結婚に際して先生がその絵を見て承認されたことなどお話しいただいた。若い頃の表現主義的な作品から抽象へ、そして代表的な「走る、たじろぐ、かがむ、投石する」の4つの人形(ひとがた)のモチーフからなる作品へと作風は変化していくのだが、初期の作品でその価値を見極めた荻先生の慧眼に敬服するとともに、作風の大きく違う先生をうならせた若干二十歳過ぎの画家の力量にも驚きを新たにしたのであった。その後、芳賀前館長とはいずれ越前海岸のアトリエへ伺おうと話してはしていたのだが。

そして今年の春、三島の大岡信ことば館で『宇佐美圭司 制動・大洪水』展を見た。癌を告知しての展覧会であったが、その第II章では「大洪水の予感、あるいは痕跡」と題して初期の作品が並んでいた。死と隣であった中で原点の再確認。本当はそこからまた新たな展開が生まれるはずであったのだろうが。私としては知的で力感豊かな初期作品に魅入るばかりであった。

COLUMN & TOPIC

本書は日本中世社会での贈与行為をめぐる様々の意味を問うた興味ある一書である。贈与という悪いイメージがつきまとうが、その儀礼が果たした役割を評価し見直す。贈与の儀礼に経済との関係から切り込んだ点が新鮮である。

贈与を受けた人は返礼をするが、その返礼のしかたには相手と自分との身分関係などにより文面に相違があるが、返事を出すタイミングにも身分差が反映されていたという。身分差が僅少であれば即日の返礼がなされるであろうが、身分差が大きいと返礼までの日数を故意にかけるという。また、贈り物は、持参する場合には目録や折紙(おりがみ)を添えるが、銭の贈答ではいきなり現金を贈ることはせず、まず金額を記した折紙を届けるのが普通で、折紙の手交から銭が渡されるまで数か月から、さらには一年を越えるものもめずらしくないという。この贈与における時差は、過去の贈与を未来の収入によって清算することを可能にし、また、受贈者が期待に込めてくれなければ贈り損となる贈与者のリスクを救済すること

桜井英治著 『贈与の歴史学』

にもなったとされる。さらに年貢の未進を折紙で清算する債権・債務の操作をも可能としたという。このような贈与の儀礼行為に潜む様々な意外な事実が具体例を踏まえて説かれている。

年中行事である中元や歳暮、バレンタインギフトなど現代の日常生活のなかにも贈答儀礼は健在している。年賀状やメールも広い意味では贈答儀礼であろう。贈与の本来の意味は、人と人、集団と集団が良好な関係を維持してゆくためのコミュニケーションであるとする、著者もいうように本書で述べられた中世の贈与行為はそこからかけ離れたものということができよう。しかし、そこに潜む意味は決して中世に特化されるものではないであろう。そのことは本書を読む現代人にも共感できることがなよりの証拠である。

中公新書(本体800円+税)



映画評

千葉真智子

近代建築の巨匠ル・コルビュジエが南米アルゼンチンに建てた「クルチェット邸」(現在資料館として一般公開)が舞台となったこの映画。完全フィクションなのだが、殆どのシーンがこの邸宅内で撮影されているため、物語の展開を追いながら空間を体験し、ディテールを見られるという建築好きにはとても嬉しい作りとなっている。とは言え、本作において、邸宅は単に視覚を満足させるためだけの装置となっていない。物語は、隣人がある日突然、主人公であるデザイナーの暮らす邸宅に近接する家の外壁に窓を穿ち、プライバシーを巡るトラブルに発展するという、誰にでも起こり得る「近所ネタをモチーフとしているのだが、「ル・コルビュジエの家」であることが、この単純な物語を展開するための原動力となり、多面的な意味をもたらすことにつながっている。

隣人は「陽を分けてくれ」と言いながら壁に穴を開ける。これが大問題に発展するのは、クルチェット邸が「水平連続窓」を提唱したル・コルビュジエの設計故に、そもそもガラス張りで外部に開かれてい

「ル・コルビュジエの家」(アルゼンチン、103分) 監督:ガストン・ドゥプラット&マリアノ・コーン

るからである。こうしてプライバシートな住空間はあつてなく外部に晒され、これを機に、家族の不和という他人が知りえないプライバシーが物語のなかでクロウズアップされることになる。

また、モダンなデザイナーと野蛮な隣人という対照的なキャラクターを設定し、卑下していた隣人が予期せぬお客としてモダニズム美学の象徴たるクルチェット邸の敷居をまたぐという展開を設けることで、野蛮なる力を前に右往左往するモダンなデザイナーの哀れは一層効果的に表現されることになる。そして衝撃のラスト。デザイナーは、娘を助けるために強盗に撃たれた隣人を助けるのか否か。モラルと私情の狭間で逡巡したデザイナーは、やがて隣人を残し、ゆつくりと上階へ続く長いスロープをのぼりはじめる。ル・コルビュジエの建築に特徴的なスロープが、やっつかいな隣人との決別を象徴する境界線となるのだ。

ユーモアを交えながら、「クルチェット邸」という唯一無二の建築のもつ性格を存分に活かした作品であった。

武家の古都・鎌倉

鎌倉は二〇二三年の世界遺産登録を目指しており、今秋、鎌倉に縁深い三つの博物館が連携して「武家の古都・鎌倉」を共通テーマに展覧会を開催していた。私は三館全て巡ったが、各館が各々の持ち味を生かした切り口で、古都鎌倉の魅力を伝えようとした面白い企画であった。鎌倉国宝館は三十軀を超える仏像をはじめ市内の寺社の至宝を中心に、鎌倉で育まれた豊かな武家文化を、県立金沢文庫では北条一族が設けた金沢文庫及び菩提寺称名寺の歴史の意義や鎌倉における顕密・禅律・新仏教の展開を紹介し、さらに県立歴史博物館では出土品や古文書などから中世都市鎌倉の姿の再発見を試みている。

同時に源氏緑りの鶴岡八幡宮や建長寺をはじめとする鎌倉五山などの寺社も訪れた。鎌倉は背後三方を山に護られ、前方には相模湾が広がる。市中は開けているが、山麓をぬう街道の急坂を上ると、山間には静謐な禅の空間が広がっており、鎌倉が武士の都であると同時に、禅宗など新仏教が花開いた地であることがわかる。

資料は博物館の展示だけで理解できるものではない。それが生まれ、育まれた場所を訪ねることで、理解がより深まる。それを実感した秋の旅であった。(浦)

おしゃべり、あれこれ。

ご当地キャラ雑感

最近なにかと話題のご当地キャラ、今や彼らは町の顔として欠かせません。「岡崎アート&ジャズ2012」でも、オカザエもんが話題になりました。

キャラクター好きにとっては、ご当地キャラは旅の楽しみです。昨年、ひこにやんに会うために彦根城へ行ったのはいい思い出。身の回りの品も、名刺入れはひこにやん(滋賀県彦根市)、スマホの待受はバリエイさん(愛媛県今治市)、イヤホンジャックにはくまモン(熊本県)と、ゆるキャラグランプリ歴代王者に染まっているこの頃。そしてマダカップには、十一月にデビューしたばかりの岡崎市観光協会のキャラクター「イエヤスコウとシテンニョシカ」。淡いパステルカラーと曲線を描く魅惑のフォルムを兼ね備えた彼らの今後に期待です。

また最近、ツイッターでねこまさむね(宮城県仙台市)を発見。三日月兎と隻眼が特徴的だからか、猫であろうと伊達政宗がモデルと認識できる、彼の知名度と汎用性は素晴らしい。徳川家康や徳川四天王はその辺どうでしょう？

実はこうしたキャラクター文化は、江戸時代の妖怪ブームが源流という説があります。伝統ならいいじゃない!というところで、私はこれからもキャラたちを愛でていく所存です。(酒)

編集後記 | 今回、「2012年、印象に残った展覧会」というお題を出したものの、いざ自分も挙げようとする面白く拝見したはずの展覧会もなかなか思い出せず。あっという間に過ぎたと感じた1年が、実は長かったことに気づかされます。2013年、気持ちを新たに、みなさんに面白いと感じていただける展覧会を提供できるよう、職員一同で頑張ります。(千葉)

表紙図版:昭和30年代の茶の間風景(平成22年度展覧会より)



開館時間 午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで
休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第55号 2013年1月発行
編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内
TEL.0564-28-5000(代表)

岡崎市美術館

<http://www.city.okazaki.aichi.jp/museum/bihaku/top.html>

ARCADIA